

[科目区分]：リーダーシップ開発コース・教育実践開発コース

[授業科目名]：生徒指導・進路指導の実践研究

[登録学生数]：19

平成 29 年度「授業評価・授業研究報告」

教育学研究科 城戸 茂

## 1 授業の目標及び内容

本授業は、教育実践高度化専攻の1回生を対象として実施したものである。本授業の目標は、①生徒指導及び進路指導の現状と課題について理解すること、②生徒指導・進路指導に当たる教員への指導・助言の観点を示すことができることの2点とした。

また、中核的なDPとして、「3. 学校経営や教育実践をめぐる現代的諸課題について、幅広く専門的な知見をもとに、その対応方を適切に考え、高度な実践力をもって学校経営・教育活動に取り組むことができる〔思考・判断・表現〕」及び「4. 学校に対する社会のニーズと自己の学習課題・研究課題を明確に意識し、実践を省察しつつ先導的に学習し研究する高度な教育実践力をもった専門的職業人として、自己の使命と責任とを自覚し、自主的に社会に貢献し ようとする〔関心・意欲・態度〕」を掲げて取り組んだ。

授業内容の概要はシラバスに示したとおりであるが、生徒指導・進路指導の現状から取り組むべき課題を考察し、その改善に向け、関係機関や専門家等との連携を図りながら学校全体で組織的に取り組んでいくための方策について具体的事例を織り交ぜながら検討していくことを中心に構成した。

授業形態は、最新の学術成果について講義形式で学ぶ部分と、学校現場で話題になることが多いじめや不登校、反社会的行動に関する事例を基に、学部時代や学校現場で身に付けた知見を活用してディスカッションする場면을効果的に位置付ける構成を基本とした。さらに、集中講義の利点を生かし、児童自立支援施設を訪問し、生徒指導や進路指導上の困難を抱える児童生徒に対する関わり方について、実際の指導場면을観察したり、職員の体験談を聞くなど実践的な学習を行った。

## 2 授業評価

次ページの表は、最終回の授業の中で実施したDPに対応したアンケート結果の一部で

ある。本調査結果を手掛かりに本授業を振り返ると、次のような成果と課題を挙げることができる。

まず、成果として次の2点を挙げることができる。1点目は、全ての学生が本講座で学んだ知識やこれまでの学習や教職経験で身に付けた知識を活用し、事例や訪問見学での学びを深めている様子がうかがえることである。例えば、整理番号1の学生では、新学習指導要領に関する既得の知識を、本講座の学びと関連づけることにより、生徒指導、進路指導の本質の理解を深めている様子がうかがえる。また、整理番号2の学生は、本講座の中で学んだ生徒指導の本質に関わる理解を、施設訪問での観察によって具体化し、理解を一層深めている様子がうかがえる。このことから、〔思考・判断・表現〕に関する能力については全ての学生が達成したと判断することができる。

2点目は、多くの学生が本講座で学んだ生徒指導、進路指導に関する知見を踏まえ、学んだことの実践を指向していることである。例えば、整理番号4の学生は、講座で学んだ生徒指導の三機能に関する実際の指導の姿を施設訪問での観察を通して理解したことにより、学校現場での実践を意識した記述がみられる。受講者19名の状況を分析すると、現職教員8名は全員、学習した知識・技能について学校現場での実践を指向する記述が明確に見られた。一方、ストレートの学生については11名中7名であった。しかし、明確な記述が見られなかった7名も、例えば整理番号3の学生のように、重要な指導のポイントについて実感を伴った理解ができている様子がうかがえることから、実践化も期待できる。このことから、〔関心・意欲・態度〕に関する能力については全ての学生がおおむね達成したと判断することができる。

一方、課題としては、評価方法の不十分さが残る点である。自由記述だけにしたことから評価の曖昧さが残った。今後、複数の評価

方法を組み合わせるなど、より適切な評価方法を検討していきたい。

以上、本講座においては、設定したねらいがおおむね達成できたと見ることができることから、授業設計についてはおおむね適切であったと考える。次年度は、評価方法を再検討した上で、より質の高い講座にしたい。

### 3 地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業は、主として生徒指導、進路指導に関する具体的事例や、生徒指導に関する力量を備えた職員が働く施設見学を通して、よりよい生徒指導、進路指導の在り方について考えることを重視して取り組むこととした。そこで、学生の実態を踏まえ、基本的な事項と最新の研究成果等を学んだ後、具体的事例を基にディスカッションすることを通して、理解を深めるとともに、施設訪問を行い生徒指導に関する質の高い実践に触れることにより、一人一人の学生の学校現場での実践意欲を高めることができるよう意図的に授業設計を行った。こうした成果の一端は、表で示したアンケート結果に見ることができる。

教員養成の場においては、授業で学んだことが将来の教壇での実践につながることを意図して実施することが大切であり、教職大学院においてはその質も問われるところである。

幸いにも、本院には現職教員が複数在籍していることから、現職教員の好ましい影響がストレートの学生にも効果的に及ぶよう授業構成を工夫していきたい。

### 4 今後の課題

本年度の取組を踏まえ、次年度に向けての検討課題として次の3点を挙げるができる。

1点目は、DPとの対応を図ったシラバスと個々の授業設計の精度を一層高めるとともに、評価方法の改善を図ることである。その際、将来、ストレートの学生が教壇に立つ場面を意識するとともに、現職教員にとって一定の質の高さを保障できるよう内容の構成や学習形態等の工夫を図りたい。

2点目は、理論と実践の往還が求められる教職大学院においては、知識の習得と知識の活用を通じた能力育成の両面を重視しながら取組の質を意識的に高めていくことである。

3点目は、自発的な授業外学習の状況を把握し、その結果を返すことにより、より主体的な学びを保障していくことである。充実している学生の状況を授業の中で紹介するなどして意欲化を図りたい。

これら以外にも、改善事項は考えられるが、次年度は特にこの3点について重点的に取り組むたい。

〔表〕 アンケート結果

1	新学習指導要領で育成が求められる「学びに向かう力・人間性の育成」は、本講座で学んだ生徒指導、進路指導で目指す教育実践と重なることが多いことを実感した。
2	生徒指導は日々の子供とのかかわりの中で、自己指導力を育てていくもので、その根底には愛媛学園の職員にみなぎっていた教育愛の重要性を再確認した。実践したい。
3	生徒指導で最も重要なことは、失敗を繰り返しながらも、生徒に寄り添いながら、教師が努力し続ける背中を見せ続けることであると感じた。
4	最後に訪問した愛媛学園では、自己決定、共感的な人間関係、自己存在感の生徒指導の要である三つの要素が、多くの指導場面で見られた。意識した指導をしていきたい。
5	生徒指導では成長を促す指導の重要性を認識し、全教職員が全生徒に関わっていくことが基本であることを再認識できた。現場に戻ったら特に大切にしたい。
6	事例を基にしたディスカッションや、愛媛学園訪問を通して、生徒指導においては、いかなる場合も子供と共に歩いていくことの重要性を実感した。
7	愛媛学園の指導に見られる人間的温もりに感動した。現場に戻ったら、一人一人の児童に自分の思いを届けられるよう一層努力したい。
8	生徒指導は、児童生徒が自己実現を目指す個性化と社会に適応し参画する社会化を目指す教育活動である。こうした教育活動ができるよう、教師としての力量を高めたい。
9	子供たちが頑張ろうとするような雰囲気づくりが生徒指導の原点であることを実感した。愛媛学園の職員の生き方を見習い、実践に努めたい。
10	生徒指導も進路指導も最終的には生徒自身の思いが大切であることを知った。一人一人のよりよい自己決定ができるよう、教壇に立ったら <b>with</b> の精神で取り組みたい。